

学長賞

「夜中に台所でぼくはきみに話かけたかった」

谷川俊太郎（青土社）

情報メディア学科 松本小春

近年よくあるライトノベルのタイトルではない。

1975年に発行された谷川俊太郎氏の詩集だ。教科書で名前を見かけたことのある人も少なくないだろうと思う。

これは私が彼の詩を好きになるきっかけになった本である。

夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった。背表紙のタイトルが目に入った途端、たちまち惹かれた。

夜中の台所で、きみは何をしていたのか？何故ぼくはきみに話しかけたかったのか？結局話しかけられたのだろうか？

淡々とした言葉の羅列のようであって、誰かの独白の様にも思えた。

詩集であるということは、本を開いて初めて気付いたことだった。

彼の詩は言葉遊びが巧みで、韻を踏む音楽のようにリズムカルで楽しいものが多い。

言葉の乱暴さの中に優しさがある。またその逆もある。

「うんうん」と即座にうなずけるような詩、

心の中で形づくられていない気持ちを代弁する詩、

熟考するほどに深みの増していく詩、多種多様である。

どれも「生きること」に根ざした言葉たちなので、お気に入りの詩がきっと見つかるはずだ。

さらに本書は内容だけでなくひとつの作品としてもおすすめできる。

限りなく不必要を取り除いたシンプルな作りが美しい。

ページには余白が多いが、けして無駄な空白ではない。

詩を眺めて想像するのは色や音、景色や物語、なんだっていい。

読み手が自由にあれこれと考えて楽しめる、そんなスペースがある。

本を開けば開くほど、変容し、あなたのための本になってゆく。

ぎっしりと濃厚で充実した読書の時間、それはとても素晴らしい。

しかし、活字に疲れてしまった時には。詩の世界にどっぷりと身を沈めて、自分の空想を解き放つのもありだろう。

もやもやと眠れない夜には、この本を手にとってみてはいかがだろうか。

さらに眠れなくなるかもしれないが。